

Research Monograph Series

生成の位相存在論の公理系

——存在生成の基礎理論——

Axioms of Generative Topological Ontology Foundations of Generative Being

Author : Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)

ORCID : <https://orcid.org/0009-0009-3796-5889>

Affiliation : Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics

Version : 1.0

Last Updated : July 23, 2026

Status : Ongoing Research

Research Monograph

Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)

Version 1.0 July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

Axioms of Generative Topological Ontology: Foundations of Generative Being

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 23, 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本論文の目的は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の理論的基礎を、公理系として体系化することにある。従来の存在論は、存在を固定的な対象あるいは実体として把握する傾向が強かった。これに対し、本研究は、存在を固定的実体ではなく、自己・他者・環境の相互作用を通じて絶えず生成される位相的構造として定義する。

本論文では、まず理論を構成する基本概念を明確化し、その上で存在生成を記述するための公理群を提示する。さらに、公理から導かれる定理および系を通じて理論の整合性と論理的一貫性を検討し、その応用可能性を芸術、美学、人工知能、インターフェイス論、社会システムへと展開する。

生成の位相存在論において、存在は閉じた対象ではなく、接続可能性を本質とする開かれた構造である。また、生成とは単なる状態変化ではなく、異なる位相間の関係性が新たな存在様態を創発する過程として理解される。この枠組みは、近代哲学における主体／客体二元論を超え、存在を動的かつ関係的に記述するための統一的理論を提供する。

本研究は、哲学・美学・芸術理論・人工知能研究を横断する基礎理論として、存在・生成・インターフェイスを統合的に説明する新たな存在論の構築を目指すものである。

キーワード

生成の位相存在論；公理系；存在論；インターフェイス存在論；生成；人工知能；位相

目次

Contents

第0章 Methodological Note（方法論的覚書）	1
第1章 Primitive Concepts（原始概念）	3
第2章 Definitions（定義）	6
第3章 Axioms（公理）	9
第4章 Theorems（定理）	14
第5章 Corollaries（系）	19
第6章 Consistency and Independence（整合性と独立性）	24
第7章 Discussion（理論的考察）	28
結論.....	32
参考文献	36
方法論的声明	38

第0章 Methodological Note (方法論的覚書)

0.1 本論文の方法論

本論文は、存在論を新たな概念によって拡張することではなく、存在生成を記述するための最小公理系を構築することを目的とする。

近代以降の哲学は、「存在とは何か」という問いを中心に展開されてきた。存在は実体として理解され、あるいは主体・現存在・身体・差異・出来事など多様な概念によって再解釈されてきた。しかし、その多くは存在を記述する理論であり、存在がいかに生成するのかを最小の前提から体系的に導出する理論ではなかった。

本論文は、この点に方法論的転回を導入する。

すなわち、本論文は存在を定義から説明するのではなく、公理から導出する。

この方法は、数学における公理的方法に着想を得ているが、数学を哲学へ適用することを目的とするものではない。また、哲学を数学へ還元することを意図するものでもない。

本論文が採用する公理的方法とは、存在生成を説明するために必要最小限の前提を明示し、その前提から概念体系を論理的に展開する方法である。

したがって、本論文における公理とは、自明な真理を宣言するものではなく、本理論体系を成立させるための最小限の存在論的前提である。

0.2 最小理論としての生成の位相存在論

生成の位相存在論は、存在を固定された実体としてではなく、生成し続ける関係的運動として理解する。

ここでいう「生成」とは、単なる変化や運動を意味しない。

生成とは、新たな存在位相が開かれる出来事である。

また、「位相」とは幾何学的空間を意味するものではなく、関係の接続可能性によって規定される存在の構造を指す。

したがって、本理論は存在・生成・関係・位相を互いに独立した概念として扱わない。存在は生成において現れ、生成は関係において生起し、関係は位相として構造化される。

この最小構造が、本論文全体の出発点となる。

0.3 原始概念・定義・公理・定理

本論文は、以下の順序によって理論体系を構成する。

第一に、理論の基礎となる**原始概念 (Primitive Concepts)** を提示する。

原始概念は、本理論において定義されない最小概念である。これらは理論体系の出発点であり、それ以上の概念へ還元されない。

第二に、原始概念を用いて**定義 (Definitions)** を与える。

定義は、新たな概念を既存の概念によって明確化するための論理的操作である。

第三に、本理論の最小前提となる**公理 (Axioms)** を提示する。

公理は証明されない。しかし、それ以降に導かれるすべての命題の論理的基盤となる。

第四に、公理から**定理 (Theorems)** を導出する。

定理は、公理および定義から論理的に導かれる命題であり、本理論における存在生成の基本構造を示す。

第五に、定理から**系 (Corollaries)** を導出する。

系は、公理系を芸術、人工知能、インターフェイス、社会、文化などの具体的領域へ適用するための命題である。

したがって、本論文において芸術や人工知能は理論の出発点ではない。

それらは、公理系から導出される存在論的帰結として位置づけられる。

0.4 本論文の射程

本論文は、芸術理論を構築することを直接の目的とはしない。

また、人工知能論や社会理論を提示することも目的ではない。

本論文の目的は、それらを含むより根源的な存在論を構築することである。

もし本公理系が整合的であるならば、主体、他者、芸術、技術、人工知能、社会、文化は、それぞれ独立した理論としてではなく、一つの存在生成の理論から導出されることになる。

この意味において、生成の位相存在論は個別領域を説明する理論ではない。

それは、個別領域がいかに生成し得るのかを説明する基礎理論である。

0.5 本論文の基本命題

本論文全体は、次の基本命題に基づいて展開される。

存在は実体ではない。

存在とは、生成し続ける関係の位相的構造である。

したがって、本論文の課題は、「存在とは何か」を定義することではない。

本論文の課題は、「存在はいかに生成するのか」を最小公理系によって記述することである。

以下、本論文はこの基本命題に基づき、原始概念、定義、公理、定理、系という順序で、生成の位相存在論を体系的に構築する。

第1章 Primitive Concepts（原始概念）

——生成の位相存在論における理論の出発点——

1.1 原始概念の位置づけ

本章では、本理論体系を構成する**原始概念（Primitive Concepts）**を提示する。

原始概念とは、本理論において定義されない最小概念である。これらの概念は、それ以上の概念へ還元されず、公理系全体の論理の出発点となる。

数学において「点」「直線」「集合」が定義されずに導入されるように、本論文においても原始概念は他の概念によって説明されない。もし原始概念をさらに定義しようとするれば、定義は循環し、公理系としての独立性を失うことになる。

したがって、本章の目的は原始概念を説明することではない。

本章の目的は、本理論が依拠する最小概念を明示することである。

以下に示す七つの概念は、それぞれ独立した意味を持つのではなく、相互の関係においてのみ理論体系を形成する。

1.2 Primitive Concept 1 : Being（存在）

本理論における第一の原始概念は**存在（Being）**である。

存在は、本理論の対象である。

しかし本段階では、存在を実体とも、対象とも、主体とも定義しない。

存在とは何であるかは、公理系全体を通してはじめて明らかになる。

したがって、「存在」は現段階では定義されない。

1.3 Primitive Concept 2 : Generation（生成）

第二の原始概念は**生成（Generation）**である。

生成とは、本理論において存在を理解するための最も根源的な運動である。

しかし現段階では、生成を変化、運動、発展、創造などの既存概念へ還元しない。

生成とは何であるかは、公理によって初めて規定される。

したがって、「生成」もまた定義されない。

1.4 Primitive Concept 3 : Relation（関係）

第三の原始概念は**関係 (Relation)**である。

本理論は、存在を孤立した実体としてではなく、関係において理解する。

しかし現段階では、関係を因果関係、社会関係、論理関係などの特定の関係へ限定しない。

関係とは、公理系全体において最も基本的な存在様態の一つとして導入される。

1.5 Primitive Concept 4 : Topology (位相)

第四の原始概念は**位相 (Topology)**である。

ここでいう位相とは、数学における位相空間を直接意味するものではない。

また、単なる空間構造を意味するものでもない。

本理論において位相とは、存在と関係が形成する接続可能性の構造を指す。

しかし、この段階ではその詳細を定義しない。

位相は、公理系全体を通して意味を獲得する原始概念である。

1.6 Primitive Concept 5 : Difference (差異)

第五の原始概念は**差異 (Difference)**である。

差異は、本理論において生成を可能にする条件の一つである。

しかし差異を対立、区別、否定、あるいは二項対立として理解しない。

差異とは、存在生成を可能にする最小条件として導入される。

その存在論的意味は、後続する公理によって明らかになる。

1.7 Primitive Concept 6 : Reality (現実)

第六の原始概念は**現実 (Reality)**である。

本理論において現実とは、経験的世界や物理世界を意味する概念ではない。

また、主観的経験や客観的事実を指す概念でもない。

現実とは、本理論において独立した原始概念として導入される。

その存在論的位置づけは、公理系を通して規定される。

1.8 Primitive Concept 7 : Interface (インターフェイス)

第七の原始概念は**インターフェイス (Interface)**である。

本理論においてインターフェイスとは、情報機器の操作面や通信技術を意味しない。

また、主体と客体を接続する媒介としても定義しない。

インターフェイスは、本理論において独立した原始概念であり、後続する公理によって

存在論的意味を獲得する。

したがって、本段階ではその機能も役割も規定されない。

1.9 原始概念相互の非還元性

以上の七つの原始概念は、互いに独立して導入される。

いずれの概念も、他の概念によって定義されない。

例えば、

存在は生成によって定義されない。

生成は関係によって定義されない。

関係は位相によって定義されない。

位相は差異によって定義されない。

差異は現実によって定義されない。

現実はいんたーフェイスによって定義されない。

この非還元性は、公理系の論理的独立性を維持するための方法論的要請である。

原始概念は、公理以前にその意味を固定することを避け、公理体系全体の中で相互に規定される。

1.10 本章の結論

本章では、生成の位相存在論を構成する七つの原始概念を提示した。

これらは定義される概念ではなく、本理論全体の論理の出発点である。

したがって、本章だけでは、それぞれの概念は十分な意味を持たない。

原始概念の意味は、次章における定義 (Definitions)、さらにその後の公理 (Axioms) によって体系的に規定される。

ゆえに、本章は存在を説明する章ではない。

本章は、存在生成を記述するための最小概念集合を提示する章である。

第2章 Definitions (定義)

——生成の位相存在論における基本概念の定義——

2.1 本章の目的

前章では、本理論体系を構成する原始概念 (Primitive Concepts) を提示した。それらの概念は定義されず、公理系全体の論理的出発点として導入された。

本章では、それらの原始概念を用いて、本理論の基本概念を定義する。

ここでいう定義とは、新たな概念を創造することではない。定義とは、公理以前に理論体系の対象を明確にするための論理的操作である。

したがって、本章における定義は、公理を導くための準備であり、公理そのものではない。

Definition 1 存在 (Being)

存在とは、生成の対象ではなく、生成において現象する位相である。

この定義は、存在を固定された実体として理解する立場を採用しない。

存在は、それ自体として完結したものではなく、生成を通して現れる。

したがって、本理論において存在は静的概念ではなく、生成との不可分な関係において理解される。

Definition 2 生成 (Generation)

生成とは、新たな存在位相が成立する存在論的運動である。

生成は単なる時間的变化でも、因果的变化でもない。

生成とは、それまで成立していなかった存在構造が成立することである。

したがって、生成は運動ではあるが、物理的運動へ還元されない。

Definition 3 関係 (Relation)

関係とは、存在生成を可能にする最小単位である。

本理論において関係は、存在者同士を結び付ける後続的作用ではない。

関係は存在に先行する。

存在は関係の結果として現象する。

したがって、本理論では存在より関係が根源的である。

Definition 4 位相 (Topology)

位相とは、関係が生成する接続可能性の構造である。
ここでいう位相とは、物理空間でも幾何学的形状でもない。
位相とは、生成し得る関係全体が形成する構造である。
したがって、位相とは空間ではなく、関係生成の条件である。

Definition 5 現実 (Reality)

現実とは、生成した関係が還元不能となる位相である。
現実とは客観世界でも主観世界でもない。
また、物理的事実でも心理的経験でもない。
本理論において現実とは、存在生成がそれ以上他の関係へ完全には還元できない状態を指す。
したがって現実とは、生成の停止ではなく、生成の不可逆性が現象する位相である。

Definition 6 インターフェイス (Interface)

インターフェイスとは、異なる位相の間に生成条件を形成する存在論的境界である。
一般にインターフェイスは接続装置として理解される。
しかし、本理論ではそのようには定義しない。
インターフェイスは接続そのものではない。
インターフェイスとは、新たな生成が可能となる条件を成立させる位相的境界である。
この意味で、インターフェイスは存在生成に先行する条件である。

Definition 7 自己 (Identity)

自己とは、生成する関係が一時的に局所的安定を獲得した位相である。
本理論において自己は実体ではない。
また、不変の主体でもない。
自己とは、関係生成が一時的に安定した局所構造である。
したがって自己とは固定された存在ではなく、常に生成し続ける位相である。

Definition 8 自己外部化 (Self-Externalization)

自己外部化とは、自己が自己以外との関係生成を通して自己を成立させる存在論的運動である。
ここで重要なのは、自己外部化を自己喪失として理解しないことである。
自己は自己以外へ投影されることによって失われるのではない。
自己は自己以外との関係生成を通して初めて自己となる。
したがって自己外部化とは、本理論における存在生成の基本運動である。

なお、この定義は現象記述であり、その必然性は後続する公理および定理によって論証される。

2.2 定義相互の構造

以上の定義は、独立した概念の列挙ではない。

Definition 1からDefinition 8までは、一つの論理的系列を形成している。

存在は生成において現れ、

生成は関係において成立し、

関係は位相として構造化され、

位相は現実として還元不能性を獲得し、

その位相転換条件がインターフェイスであり、

その局所的安定状態が自己となり、

自己は自己外部化を通して存在生成を継続する。

したがって、本章における定義群は循環構造ではない。

それらは存在生成を記述する最小概念系列として構成されている。

2.3 本章の結論

本章では、生成の位相存在論を構成する基本概念を定義した。

これらの定義は、本理論が対象とする概念領域を明確化するものであり、公理そのものではない。

次章では、ここで定義された概念を前提として、公理 (Axioms) を提示する。

公理は、本理論の最小前提として位置づけられ、それ以降に導かれる定理および系の論理的基盤となる。

したがって、本章は概念の意味を与える章であり、次章は存在生成の論理構造そのものを提示する章となる。

第3章 Axioms (公理)

——生成の位相存在論の最小公理系——

3.1 本章の目的

前章では、本理論を構成する基本概念を定義した。しかし、定義は理論の前提ではない。定義は概念の意味を明確にする論理的操作であり、それ自体が理論を成立させるわけではない。

理論を成立させるのは公理である。

本章では、生成の位相存在論を成立させるための最小公理系を提示する。

本理論における公理は、経験的事実を一般化した命題ではない。また、証明される命題でもない。

公理とは、本理論全体を支える最小限の存在論的前提である。

以下の五公理は、それぞれ独立した論理的役割を担うと同時に、相互に補完し合うことによって一つの存在論的体系を構成する。

Axiom 1

存在は生成である。

Being is Generative.

公理

存在は固定された実体ではなく、生成としてのみ現象する。

解釈

本公理は、存在を静的な実体として理解する立場を採用しない。

存在とは、完成された対象でも、自己完結した本質でもない。

存在は常に生成の過程として現れ、その生成を離れて存在そのものを措定することはできない。

したがって、本理論において存在とは「生成する存在」であり、「生成される以前の存在」は理論上は措定されない。

採用理由

もし存在を固定的実体として措定すれば、生成は存在に付随する二次的現象となる。

しかし、本理論は存在そのものを生成として理解する。

この公理は、生成の位相存在論全体の最も根源的前提である。

Axiom 2

生成は関係においてのみ生起する。

Generation is Relational.

公理

いかなる生成も、関係を離れて成立しない。

解釈

生成は孤立した存在内部では生起しない。

生成は常に何らかの関係において成立する。

ここでいう関係とは、人間関係や因果関係を意味するのではない。

関係とは、存在生成を可能にする最小構造である。

したがって、本理論では存在よりも関係が根源的である。

採用理由

第一公理だけでは、生成がどのように成立するかは説明できない。

本公理は、生成の成立条件として関係を導入するために必要である。

Axiom 3

関係は位相的である。

Relations are Topological.

公理

関係は距離ではなく、接続可能性によって構造化される。

解釈

本理論において位相とは、幾何学的空間ではない。

位相とは、関係が形成する接続可能性の構造である。

したがって、生成は位置や距離によって決定されるのではなく、接続可能性によって規定される。

この公理によって、本理論は空間論ではなく位相存在論となる。

採用理由

生成は単なる関係ではない。
生成する関係には構造が存在する。
その構造を規定するため、本理論は位相を導入する。

Axiom 4

現実とは、関係生成が還元不能となる位相である。
Reality emerges where relational generation becomes irreducible.

公理

現実とは、生成した関係がそれ以上他の関係へ完全には還元できない位相である。

解釈

現実とは物質ではない。
現実とは情報でもない。
現実とは、生成した存在が、その存在生成を維持しながら、それ以上他の構造へ完全には還元できない状態である。
この還元不能性によって、存在は現実として経験される。
したがって、本理論において現実とは、存在生成の停止ではなく、存在生成の不可逆性が現象する位相である。

採用理由

本公理は、「現実」を客観世界や主観世界へ還元することなく、存在生成の構造から導出するために導入される。
これにより、本理論は現実を経験論ではなく存在論として扱うことが可能となる。

Axiom 5

インターフェイスは位相転換を誘発する。
Interfaces induce topological transitions.

公理

異なる位相の間に新たな生成条件を形成する存在論的契機を、インターフェイスという。

解釈

一般にインターフェイスは接続面として理解される。
しかし、本理論ではそのように理解しない。

インターフェイスは接続の結果ではない。

インターフェイスとは、新たな生成が開始される条件である。

したがって、インターフェイスは存在生成を可能にする位相転換そのものではなく、位相転換を誘発する条件である。

採用理由

本理論では、生成は連続的変化ではない。

生成とは、新しい位相への移行である。

その移行条件を規定する概念として、インターフェイスは不可欠である。

3.2 五公理の相互関係

以上の五公理は、独立した命題でありながら、一つの論理的系列を形成する。

第一公理は、存在を生成として理解する。

第二公理は、その生成が関係においてのみ成立することを示す。

第三公理は、関係が位相構造を形成することを示す。

第四公理は、その位相が還元不能性を獲得した状態を現実として規定する。

第五公理は、その位相が新たな生成へ移行する条件としてインターフェイスを位置づける。

この系列によって、本理論は存在を固定的対象としてではなく、位相的生成運動として理解する。

3.3 公理系の特徴

本公理系は、存在・生成・関係・位相・現実・インターフェイスを最小限の前提として統合する。

重要なのは、本章にはまだ、

自己

他者

自己外部化

芸術

AI

社会

といった概念が存在しないことである。

これらは公理ではない。

これらは、公理から導かれる命題である。

したがって、本理論は最初から人間中心の理論ではない。
本理論は、人間以前の存在生成を記述する最小理論として構成される。

3.4 本章の結論

本章では、生成の位相存在論を成立させる五つの公理を提示した。
これらの公理は、本理論全体の論理的基盤であり、以後に導かれるすべての定理および系は、この五公理に依拠する。
次章では、この公理系から論理的に導かれる基本命題を**定理 (Theorems)** として提示する。
そこで初めて、「自己」「自己外部化」「存在の開放性」「インターフェイスによる生成」といった、本理論の中核概念が公理系から導出される。

第4章 Theorems (定理)

——生成の位相存在論の論理的帰結——

4.1 本章の目的

前章では、生成の位相存在論を構成する五つの公理を提示した。

公理は証明されない。

しかし、公理が理論体系である以上、その論理的帰結は導出されなければならない。

本章では、公理系から直接導かれる基本命題を**定理 (Theorems)** として提示する。

ここで示される定理は経験的事実ではなく、公理系の論理的帰結である。

したがって、本章は存在生成の具体例を述べる章ではない。

本章は、公理がどのような存在論を構成するのかを示す章である。

Theorem 1

存在は局所的に現象する。

Being Emerges Locally.

定理

存在は全体としてではなく、局所的位相として現象する。

証明

公理1により、存在は生成である。

公理2により、生成は関係においてのみ成立する。

関係は常に具体的な位相において成立するため、存在は抽象的一般性としてではなく、局所的生成として現象する。

■

解釈

存在とは、全体を先に措定した結果ではない。

存在は、それぞれの局所において生成する。

したがって、本理論において存在は常に個別具体的である。

Theorem 2

存在は開いている。

Being is Open.

定理

生成する存在は閉じた体系を形成しない。

証明

公理3により、関係は接続可能性として構造化される。
接続可能性が存在する以上、存在は新たな生成可能性を保持する。
したがって、存在は閉じた体系として完結しない。

■

解釈

存在は完成された実体ではない。
存在とは常に新たな生成へ開かれた構造である。
この意味において、本理論は閉じた存在論ではなく、開かれた存在論である。

Theorem 3

自己は関係において生成する。
Identity Emerges Relationally.

定理

自己は独立した実体ではなく、関係生成の局所的安定として成立する。

証明

公理2は、生成が関係においてのみ成立することを示す。
Definition 7により、自己とは局所的安定状態である。
したがって、自己は関係生成から独立して存在することはできない。

■

解釈

自己とは固定的主体ではない。
自己とは関係生成が一時的均衡を獲得した位相である。

Theorem 4

自己外部化は存在生成の必然条件である。
Self-Externalization is Necessary for the Generation of Identity.

定理

自己は自己以外との関係生成を通してのみ成立する。

証明

定理3より、自己は関係において生成する。

自己のみでは関係は成立しない。

したがって、自己生成は必然的に自己以外との関係生成を含む。

この存在論的運動を自己外部化という。

■

解釈

本理論において自己外部化とは心理学的現象ではない。

それは自己生成の論理的条件である。

ゆえに、自己外部化は自己喪失ではなく、存在生成そのものの条件である。

Theorem 5

現実には完全には外部化できない。

Reality Cannot Be Fully Externalized.

定理

現実には、自己外部化によって完全に置換されることはない。

証明

公理4は、現実を還元不能な位相として定義する。

還元不能である以上、現実は他の関係へ完全に変換されない。

したがって、自己外部化はいかに進行しても現実そのものを消滅させることはできない。

■

解釈

自己外部化は現実を失わせるのではない。

むしろ、現実の還元不能性を際立たせる。

ここに現実への直面という存在論的契機が成立する。

Theorem 6

インターフェイスは新たな存在位相を生成する。
Interfaces Generate New Phases of Being.

定理

インターフェイスは、存在生成の位相転換条件である。

証明

公理5は、インターフェイスが位相転換を誘発することを示す。
位相転換は新たな存在生成を意味する。
したがって、インターフェイスは存在生成を可能にする条件である。

■

解釈

インターフェイスは接続面ではない。
インターフェイスとは、新たな存在が生成する契機である。

Theorem 7

現実への直面は存在生成を誘発する。
Confrontation with Reality Induces the Generation of Being.

定理

存在は、現実の還元不能性に直面することによって新たな位相へ移行する。

証明

定理5より、現実には完全には外部化されない。
定理6より、位相転換はインターフェイスによって誘発される。
現実への直面とは、還元不能性がインターフェイスとして機能する位相である。
したがって、現実への直面は新たな存在生成を誘発する。

■

解釈

存在生成は情報量によって生じるのではない。
存在生成は、還元不能な現実との遭遇によって開始される。
ここに、本理論における「契機」の存在論的位置づけが与えられる。

4.2 定理群の論理構造

以上の七定理は、互いに独立した命題ではない。

第一定理は存在の局所性を示し、

第二定理は存在の開放性を導く。

第三定理は自己を存在生成の局所構造として位置づけ、

第四定理は自己外部化を存在生成の必然条件として導出する。

第五定理は現実の還元不能性を示し、

第六定理はインターフェイスを位相転換条件として規定する。

そして第七定理において、現実への直面が新たな存在生成を開始する契機であることが論理的に導かれる。

したがって、本理論において自己外部化、現実、インターフェイス、契機は独立概念ではない。

それらはすべて、公理系から必然的に導出される一つの存在生成構造を異なる位相から記述した概念である。

4.3 本章の結論

本章では、生成の位相存在論の公理系から導かれる七つの基本定理を提示した。

これらの定理によって、本理論は存在を生成、関係、位相、現実、インターフェイスの連続した構造として理解する。

ここで初めて、「自己外部化」は仮説や前提ではなく、公理系から導かれる論理的帰結として位置づけられた。

次章では、これらの定理から導かれる系 (Corollaries) を提示し、芸術、Web Installation、逆問題芸術、デリバティブ空間、人工知能などへの応用可能性を論理的に導出する。

第5章 Corollaries（系）

——生成の位相存在論の応用的帰結——

5.1 本章の目的

前章では、公理系から論理的に導かれる基本定理を提示した。

定理は、本理論を構成する普遍的命題である。

しかし、公理系が理論として成立するためには、その論理的帰結が具体的な存在領域においても整合的でなければならない。

本章では、その帰結を系（Corollaries）として提示する。

ここでいう系とは、新たな公理でも、新たな定理でもない。

系とは、公理および定理から自然に導かれる応用命題である。

したがって、本章は芸術論や人工知能論を展開する章ではない。

本章は、生成の位相存在論が具体的領域に対してどのような説明可能性を持つかを示す章である。

Corollary 1

芸術とはインターフェイスを設計する実践である。

Art is the Practice of Designing Interfaces.

系

芸術とは単に作品を制作することではない。

芸術とは、新たな存在生成を可能にするインターフェイスを設計する実践である。

導出

定理6により、インターフェイスは新たな存在位相を生成する条件である。

したがって、芸術は対象を制作する行為ではなく、存在生成の条件を設計する行為として理解される。

含意

芸術作品は目的ではない。

作品は存在生成を可能にする条件として位置づけられる。

Corollary 2

Web Installationは存在生成を実装する。

Web Installation Implements the Generation of Being.

系

Web Installationとは、インターネットを利用する芸術ではない。

Web Installationとは、存在生成の条件を現実へ実装するインターフェイスである。

導出

Corollary 1より、芸術はインターフェイスを設計する。

Web Installationは、その設計を情報空間と身体空間の双方において実現する方法論となる。

含意

Web Installationは作品形式ではない。

存在生成を実装する存在論的方法である。

Corollary 3

逆問題芸術は生成条件を設計する。

Reverse-Problem Art Designs Conditions for Generation.

系

逆問題芸術は、完成した意味を提示する芸術ではない。

逆問題芸術とは、意味が生成される条件を設計する芸術である。

導出

定理7より、存在生成は契機によって開始される。

したがって、芸術は意味そのものではなく、その生成条件を設計することによって存在生成へ関与する。

含意

芸術とは解答ではない。

芸術とは、解答が生成される位相を設計する実践である。

Corollary 4

デリバティブ空間は自己外部化の社会的位相である。
Derivative Space is the Social Phase of Self-Externalization.

系

デリバティブ空間とは、自己外部化が社会的・文化的・技術的構造として展開した位相である。

導出

定理4より、自己外部化は存在生成の必然条件である。
この自己外部化が個人を超え、制度、市場、情報空間へ拡張されたとき、デリバティブ空間が形成される。

含意

デリバティブ空間は仮想世界ではない。
それは存在生成の社会的構造である。

Corollary 5

人工知能（AI）は自己外部化を加速するインターフェイスである。
Artificial Intelligence Accelerates Self-Externalization.

系

人工知能とは、人間知能を代替する存在ではない。
人工知能とは、自己外部化を加速し、その限界を可視化するインターフェイスである。

導出

定理4は自己外部化を存在生成の条件とする。
定理6はインターフェイスを位相転換条件とする。
人工知能は両者を同時に成立させる存在論的環境として理解される。

含意

AIの存在論的意義は知能にない。
存在生成の契機を拡張することにある。

Corollary 6

納まりとは局所的安定の生成である。
Osamari is the Generation of Local Stability.

系

納まりとは完成ではない。

納まりとは、関係生成が局所的安定を獲得する位相である。

導出

定理1は存在の局所性を示し、

定理3は自己を局所的安定として導いた。

納まりとは、この局所的安定が社会・身体・空間・技術において現象した状態である。

含意

納まりは停止ではない。

新たな存在生成へ向けた一時的均衡である。

Corollary 7

盆栽は生成の時間を設計するインターフェイスである。

Bonsai Designs the Temporality of Generation.

系

盆栽とは植物を縮小する技術ではない。

盆栽とは、人間と自然との関係生成を時間的に設計するインターフェイスである。

導出

定理6はインターフェイスを位相転換条件とした。

盆栽は時間を通して関係を生成し続けるため、存在生成の持続的インターフェイスとして理解される。

含意

盆栽とは自然の表象ではない。

自然と人間が共に存在生成へ参与する方法である。

5.2 系の統一構造

以上の七つの系は、それぞれ異なる対象を扱っているように見える。

しかし、それらは同一の論理構造を共有している。

芸術はインターフェイスを設計する。

Web Installationはその設計を実装する。

逆問題芸術は生成条件を設計する。
デリバティブ空間は社会における自己外部化を構造化する。
人工知能は自己外部化を加速する。
納まりは局所的安定を形成する。
盆栽は生成の時間を設計する。
これらはいずれも、存在生成という同一原理が異なる領域に現象したものである。
したがって、本章で示した諸命題は個別理論ではない。
それらは公理系から導出される応用的帰結として理解される。

5.3 本章の結論

本章では、公理系および定理から導かれる七つの系を提示した。
これらの系は、生成の位相存在論が芸術、情報技術、社会、文化、自然といった多様な領域に対して適用可能であることを示している。
重要なのは、これらの領域が理論の出発点ではないということである。
芸術も、人工知能も、Web Installationも、逆問題芸術も、デリバティブ空間も、納まりも、盆栽も、いずれも存在生成の原理から導出される存在論的帰結である。
このことによって、生成の位相存在論は特定領域の理論ではなく、多様な存在領域を統一的に説明し得る基礎理論として位置づけられる。
次章では、この公理系が理論として十分な整合性と独立性を備えているかを検討し、公理相互の関係、公理の最小性、および理論体系全体の論理的一貫性について考察する。

第6章 Consistency and Independence（整合性と独立性）

——生成の位相存在論の論理的検証——

6.1 本章の目的

第3章では生成の位相存在論を構成する五つの公理を提示し、第4章ではそれらから導かれる基本定理を示した。さらに第5章では、それらの定理から芸術、Web Installation、逆問題芸術、デリバティブ空間、人工知能などへの応用的帰結を導いた。

しかし、公理系は公理を列挙するだけでは理論とはならない。

理論体系として成立するためには、その公理系が論理的に整合し、各公理が固有の役割を持ち、体系全体が不要な前提を含まないことを示さなければならない。

本章では、生成の位相存在論を以下の四つの観点から検討する。

第一に、公理系の整合性（Consistency）を確認する。

第二に、公理相互の独立性（Independence）を検討する。

第三に、公理系の最小性（Minimality）を考察する。

第四に、本理論の適用範囲と限界を明確にする。

6.2 公理系の整合性（Consistency）

公理系の整合性とは、公理相互が論理的矛盾を生じさせないことである。

生成の位相存在論では、

存在

生成

関係

位相

現実

インターフェイス

はいずれも同一概念ではない。

しかし、それらは互いに矛盾する概念でもない。

第一公理は存在を生成として理解する。

第二公理は生成の成立条件を関係に求める。

第三公理は関係を位相的構造として理解する。

第四公理は現実を還元不能な位相として定義する。

第五公理は位相転換条件としてインターフェイスを導入する。

いずれの公理も前公理を否定するものではなく、それぞれ異なる階層の存在論的条件を提示している。

したがって、本理論は少なくとも内部的には循環論法を含まず、一貫した論理構造を形成している。

6.3 公理相互の独立性 (Independence)

公理系において重要なのは、公理が互いに独立していることである。

もし一つの公理が他の公理から導出できるなら、その公理は不要となる。

本理論における五公理について検討すると、

公理1

存在は生成である。

この命題は他の四公理から導出できない。

他の公理はいずれも「生成」を前提としているため、公理1は理論全体の最も根源的前提となる。

公理2

生成は関係においてのみ生起する。

公理1は存在と生成の関係を示すのみであり、生成がどのように成立するかは規定しない。

したがって、公理2は独立している。

公理3

関係は位相的である。

関係が存在するとしても、その構造が位相的であることは公理1・2から導けない。

したがって、公理3も独立である。

公理4

現実とは関係生成が還元不能となる位相である。

存在・生成・関係・位相だけでは、現実という概念は成立しない。

現実を還元不能性として理解することは、本理論独自の前提である。

したがって、公理4も独立している。

公理5

インターフェイスは位相転換を誘発する。
位相が存在しても、その変化条件は前四公理から導けない。
したがって、公理5も独立した役割を担う。
以上より、本理論の五公理は互いに論理的独立性を保持している。

6.4 公理系の最小性 (Minimality)

本理論は可能な限り少数の公理によって構成されることを目指している。
その理由は、公理が少ないほど理論は単純であり、説明力が高くなるためである。
現時点において、本理論は五公理から構成されている。
この五公理より少ない公理数によって同等の説明力を維持できる可能性は否定できない。

しかし少なくとも本理論の現段階では、

存在

生成

関係

位相

現実

インターフェイス

という六つの概念領域を統一的に扱うためには、五公理が必要最小限の構成であると考えられる。

したがって、本理論は完全性を主張するものではない。

むしろ、将来的な公理の圧縮や再構成を可能性として開いた体系である。

6.5 理論の開放性 (Openness)

本理論は閉じた体系を目指さない。

その理由は、公理Iにおいて存在そのものを生成として理解しているためである。

生成は新たな存在可能性を前提とする。

したがって、公理系そのものも将来的な拡張可能性を保持し続ける。

この意味において、本理論は完成された体系ではない。

完成ではなく、生成する体系である。

これは一般的な形式体系との重要な相違点である。

本理論における整合性とは閉鎖性ではない。

開かれた整合性である。

6.6 本理論の限界

本理論は存在生成を説明する基礎理論である。
したがって、本理論だけで芸術、美学、社会学、人工知能、文化論のすべてを説明することは意図していない。
本理論は、それらの領域を統一的に理解するための最小原理を提示する。
具体的な現象分析には、それぞれ固有の経験的研究および個別理論が必要となる。
したがって、本理論は経験科学に代わるものではない。
また、経験的事実を否定するものでもない。
本理論は経験以前の存在論的条件を提示する基礎理論である。

6.7 本章の結論

本章では、生成の位相存在論の公理系について、その整合性、独立性、最小性および理論的限界を検討した。
その結果、本理論は、
第一に、公理相互の論理的一貫性を保持している。
第二に、各公理は互いに独立した存在論的役割を担っている。
第三に、五公理は現段階において最小限の構成として位置づけられる。
第四に、本理論は閉じた体系ではなく、生成そのものと同様に将来的な拡張可能性を保持する開かれた体系である。
以上の考察により、生成の位相存在論は、単なる哲学的主張ではなく、最小公理系に基づく基礎理論として一定の論理的一貫性を有することが示された。
次章では、本公理系を既存の存在論、現象学、位相空間論、圏論、仏教思想などと比較し、その理論的位置づけと独自性を検討する。

第7章 Discussion（理論的考察）

——生成の位相存在論の理論的位置づけ——

7.1 本章の目的

前章までに、本論文は生成の位相存在論を最小公理系として提示した。

本章では、その公理系を既存の哲学的・数学的・思想的体系と比較し、本理論の理論的位置づけを明らかにする。

本章の目的は、既存理論の優劣を論じることではない。

目的は、本理論が何を継承し、どこで理論的転回を導入するのかを示すことである。

生成の位相存在論は、従来の存在論を否定するものではない。

むしろ、それらを存在生成という視点から再構成することを目的とする。

7.2 デカルトとの比較

近代哲学は、主体を哲学の出発点としてきた。

「我思う、ゆえに我あり」という命題は、自己を確実性の基礎に据えることによって近代主体を成立させた。

しかし、本理論では主体は出発点ではない。

自己は定義でも公理でもなく、第4章で導出された定理である。

すなわち、自己は関係生成の局所的安定として現象する。

したがって、本理論は主体から存在を説明するのではなく、存在生成から主体を導出する。

この点において、本理論は近代主体論と方法論的に異なる。

7.3 ハイデガーとの比較

マルティン・ハイデガーは存在者ではなく存在そのものを問い直し、存在論を二十世紀哲学の中心課題へ転換した。

本理論もまた、存在を固定的実体として理解しない点で、この問題意識を共有する。

しかし、両者には重要な違いがある。

ハイデガーにおいて中心となるのは現存在である。

一方、本理論では現存在は理論の出発点ではない。

存在生成そのものが先行する。

したがって、人間存在は存在生成の一つの局所位相として理解される。

また、本理論におけるインターフェイスは、存在が開示される場所ではなく、新たな存

在位相が生成する条件である。

この点において、本理論は存在の開示から存在生成へと理論の重心を移す。

7.4 メルロ＝ポンティとの比較

モーリス・メルロ＝ポンティは身体を世界との関係そのものとして理解し、主体と客体の二元論を乗り越えようとした。

本理論もまた、存在を関係において理解する点では共通する。

しかし、本理論では身体を最終的基盤とはしない。

身体もまた存在生成の一つの局所構造として理解される。

したがって、本理論は身体存在論ではなく、身体を含む存在生成論である。

7.5 構造主義・ポスト構造主義との比較

構造主義は主体よりも構造を優先し、ポスト構造主義は構造そのものの流動性を示した。

本理論は、構造が固定された体系ではないという点ではこれらと共通する。

しかし、本理論では構造そのものが生成する。

構造は存在を規定する枠組みではない。

構造は生成の結果であり、さらに新たな生成条件となる。

したがって、本理論は構造の理論ではなく、構造生成の理論である。

7.6 位相空間論との比較

数学における位相空間論は、距離ではなく開集合と連続性によって空間を記述する。

本理論は、この発想から重要な示唆を受けている。

しかし、本理論は数学的位相空間を存在へ直接適用するものではない。

本理論における位相とは、関係生成の接続可能性を記述する存在論的概念である。

したがって、本理論は数学的位相空間論を哲学化するものではなく、位相という考え方を存在生成へ拡張する試みである。

7.7 圏論との比較

圏論は対象ではなく射を基礎概念とする。

対象は射のネットワークの中で理解される。

この発想は、本理論の関係先行性と高い親和性を持つ。

しかし、本理論は圏論そのものではない。

本理論が扱うのは射ではなく生成である。
射は関係を記述する。
本理論は、その関係がどのように存在を生成するかを扱う。
したがって、本理論は圏論の存在論的拡張として理解することができる。

7.8 仏教思想との比較

仏教思想、とりわけ縁起思想は、存在を独立した実体として理解せず、関係によって成立するものとして理解する。
この点は、本理論と深い共通性を持つ。
しかし、本理論は宗教的救済を目的としない。
また、存在の無常や空を信仰対象として扱うものでもない。
本理論は、存在生成を論理構造として記述することを目的とする。
したがって、仏教思想とは問題意識を共有しながらも、方法論は異なる。

7.9 本理論の独自性

以上の比較から、本理論の独自性は次の四点に整理できる。
第一に、存在を固定的実体ではなく生成そのものとして理解したことである。
第二に、存在・生成・関係・位相・現実・インターフェイスを最小公理系として統合したことである。
第三に、自己外部化を理論の前提ではなく、公理系から導かれる定理として位置づけたことである。
第四に、芸術、人工知能、情報空間、社会、文化を、個別理論ではなく同一公理系から導出される系として理解したことである。
この四点によって、本理論は存在論、芸術論、人工知能論を横断する統一理論として位置づけられる。

7.10 本章の結論

本章では、生成の位相存在論を既存の哲学および数学的理論との比較を通して位置づけた。
本理論は、近代主体論、現象学、構造主義、位相空間論、圏論、仏教思想などと多くの接点を持ちながらも、それらを単純に統合した理論ではない。
本理論の中心は、存在を生成として理解することにある。
存在は実体ではなく、生成である。
生成は関係において成立し、関係は位相として構造化される。

その生成が還元不能となる位相を現実と呼び、その位相転換条件をインターフェイスと呼ぶ。

ここから自己、自己外部化、芸術、人工知能、文化は論理的に導出される。

したがって、生成の位相存在論は既存理論の折衷ではない。

それは、存在生成を最小公理系によって記述する新たな基礎理論として位置づけられる。

結論

——存在生成の基礎理論としての生成の位相存在論——

本論文は、「生成の位相存在論」を最小公理系として提示し、存在を固定的実体ではなく生成として理解するための基礎理論を構築した。

従来の存在論は、「存在とは何か」という問いを中心に展開されてきた。そこでは存在は実体、主体、現存在、身体、構造、差異、出来事など、多様な概念によって説明されてきた。しかし、それらはいずれも存在を記述する理論であり、存在がいかに生成するかを最小前提から体系的に導出する理論ではなかった。

本論文は、この方法論的状况を転換することを目的とした。

そのため、本論文は存在論を記述的理論ではなく、公理的方法による構成的理論として提示した。

本理論は、

存在 (Being)

生成 (Generation)

関係 (Relation)

位相 (Topology)

現実 (Reality)

インターフェイス (Interface)

という原始概念を基礎とし、それらを定義、公理、定理、系という論理構造によって体系化した。

この方法によって、本論文は存在を静的対象としてではなく、生成し続ける関係構造として記述した。

本論文で提示した五つの公理は、それぞれ独立した存在論的前提として位置づけられる。

第一公理は、存在そのものを生成として理解する。

第二公理は、生成が関係においてのみ成立することを示す。

第三公理は、その関係が位相的構造を形成することを示す。

第四公理は、還元不能性としての現実を導入する。

第五公理は、存在生成を新たな位相へ導く条件としてインターフェイスを位置づけた。

これらの公理によって、存在生成は一つの論理体系として記述可能となる。

さらに、本論文では、公理から複数の定理を導出した。

その結果、

自己

自己外部化

現実への直面

存在の開放性

インターフェイス

などの概念は、本理論の前提ではなく、公理系から導かれる論理的帰結として位置づけられた。

特に重要なのは、「自己外部化」が理論の出発点ではなく、定理として導出されたことである。

これによって、自己外部化は心理学的概念でも社会学的概念でもなく、存在生成そのものが持つ構造的必然性として理解される。

この点は、本論文の中心的成果である。

さらに、本論文では、公理系から複数の系を導出した。

芸術

Web Installation

逆問題芸術

デリバティブ空間

人工知能

納まり

盆栽

などは、それぞれ独立した理論ではない。

それらはいずれも、公理系から論理的に導出される存在生成の応用的帰結である。

このことにより、本理論は芸術理論や人工知能論を包括する、より基礎的な存在論として位置づけられる。

また、本論文は既存の哲学との比較を通して、その理論的位置づけを明らかにした。

本理論は、主体を起点とする近代哲学とは異なる。

また、現存在を中心とする存在論とも異なる。

さらに、構造主義やポスト構造主義のように構造そのものを最終的基盤とする理論でもない。

本理論では、

存在は生成であり、

生成は関係であり、
関係は位相として構造化され、
その還元不能性が現実となり、
インターフェイスが新たな存在生成を開始する。
この構造が理論全体を一貫して支えている。
したがって、本理論は主体論でも、構造論でも、身体論でもない。
本理論は、存在生成そのものの理論である。

本論文は、公理系という方法を採用した。
しかし、その目的は哲学を数学へ還元することではない。
また、数学的厳密性を形式的に模倣することでもない。
本論文が採用した公理的方法は、存在生成を記述するために必要最小限の前提を明示し、それらの前提から理論体系を構築するための方法である。
したがって、本理論は閉じた体系ではない。
存在が生成である以上、理論そのものもまた生成し続ける。
ゆえに、本公理系は完成を宣言するものではなく、将来的な修正、拡張、再構成を許容する開かれた基礎理論として位置づけられる。

本論文が目指したものは、新しい概念を追加することではなかった。
目指したものは、存在生成を最小概念によって統一的に記述する理論を構築することであつた。
その結果、本論文は、
存在とは何か
という問いを、
存在はいかに生成するのか
という問いへ転換した。
この転換こそ、本論文の最も重要な理論的貢献である。

最後に、本理論全体は次の命題へ収束する。
存在は実体ではない。
存在とは、関係が位相的に生成し続ける運動である。
したがって、人間、芸術、人工知能、社会、文化は、この存在生成の多様な位相として理解される。
生成の位相存在論とは、それらを統一的に記述するための公理系であり、存在生成の基礎理論である。
本論文は、その第一歩として、存在生成を最小公理系によって記述する可能性を提示し

た。

今後の課題は、この公理系をさらに精緻化するとともに、芸術、美学、人工知能、情報技術、社会理論、日本文化などの諸領域へ体系的に展開することである。

そのとき、本論文で提示した公理系は、個別理論の前提ではなく、それらを一貫する共通の存在論的基盤として機能するであろう。

この意味において、生成の位相存在論は、一つの哲学的立場ではない。

それは、存在生成を記述するための基礎理論である。

参考文献

Arendt, Hannah. *The Human Condition*. Chicago: University of Chicago Press, 1958.

Bourbaki, Nicolas. *General Topology: Chapters 1–4*. Berlin and Heidelberg: Springer-Verlag, 1995.

Deleuze, Gilles. *Difference and Repetition*. Translated by Paul Patton. New York: Columbia University Press, 1994.

Eilenberg, Samuel, and Saunders Mac Lane. “General Theory of Natural Equivalences.” *Transactions of the American Mathematical Society* 58, no. 2 (1945): 231–294.

Heidegger, Martin. *Being and Time*. Translated by John Macquarrie and Edward Robinson. Oxford: Blackwell, 1962.

Lakoff, George, and Mark Johnson. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books, 1999.

Lawvere, F. William, and Stephen H. Schanuel. *Conceptual Mathematics: A First Introduction to Categories*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press, 2009.

Mac Lane, Saunders. *Categories for the Working Mathematician*. 2nd ed. New York: Springer, 1998.

Merleau-Ponty, Maurice. *Phenomenology of Perception*. Translated by Donald A. Landes. London: Routledge, 2012.

Varela, Francisco J., Evan Thompson, and Eleanor Rosch. *The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience*. Cambridge, MA: MIT Press, 1991.

Whitehead, Alfred North. *Process and Reality: An Essay in Cosmology*. Corrected ed. Edited by David Ray Griffin and Donald W. Sherburne. New York: Free Press, 1978.

Wittgenstein, Ludwig. *Philosophical Investigations*. 4th ed. Translated by G. E. M. Anscombe, P. M. S. Hacker, and Joachim Schulte. Edited by P. M. S. Hacker and Joachim Schulte. Oxford: Wiley-Blackwell, 2009.

田中智和（美学者母）.

『生成の位相存在論の公理系——存在生成の基礎理論——』

Research Memorandum, Version 1.0, 2026.

田中智和（美学者母）.

『自己外部化の限界と存在生成——生成の位相存在論におけるインターフェイス存在論——』

Research Memorandum, Version 0.9, 2026.

田中智和（美学者母）.

『言語デリバティブ論——人工知能のハルシネーションにおける逆問題芸術とレバレッジ構造——』

Research Memorandum, Version 1.0, 2026.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。

本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。

本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。

研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。

本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。

本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。

本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。